平成二十五年度 徳川園牡丹祭 小学生・中学生俳句大会

平成25年4月20日から5月6日まで「徳川園牡丹祭」の一環として開催した「小学生・中学生俳句大会」は、投句数にして330句のご応募をいただきました。たくさんの方々のご参加、誠にありがとうございました。

審査会を行った結果、最優秀作品　小学生の部二句、中学生の部二句、入選作品　小学生の部五句、中学生の部五句を次のとおりに決定いたしました。

（賞・部門ごとに学年順・五十音順）

◆審査会委員（五十音順）

井澤　昭雄（四日市中日文化センター講師、ともしび詩舎同人）
加藤　啓子（公益財団法人徳川黎明会 徳川美術館　企画推進部 課長）
桐原　千文（名古屋市蓬左文庫　文庫長）
岩田　正雄（公益財団法人 名古屋市みどりの協会 徳川園管理事務所 所長）

《最優秀作品・小学生の部》

名古屋市立 旭丘小学校（東区）三年　杉原 虎哲 さん

さくらがね「また来年ね」とちっていく

さくらが「今年もきれいに咲かせたよ。喜んでもらえたかな。」と誇らしげに叫んでいたところ、徳川園の牡丹から次は私たちが花を咲かせる順番だよと言われ、「よし、来年はもっときれいに咲かせるからそれまで待っててね」、と来年への期待を持たせ、惜しまれつつ散っていく気持ちが浮かぶようでありました。

【審査員　岩田　正雄】

《最優秀作品・小学生の部》

名古屋市立 東白壁小学校（東区）六年　中村 桃子 さん

びょうぶから　抜け出たような　カキツバタ

龍仙湖の水辺に咲き揃ったかきつばたの花の鮮やかな濃紫・・・その印象を直ちに五七五に表現されています。かきつばたは、江戸時代の画家尾形光琳の屏風や平安の昔の伊勢物語のなかの在原業平の和歌にもあるように、日本の伝統文化の象徴です。それを自分の目でとらえた作者の感性が感じられました。

【審査員　井澤 昭雄】

《最優秀作品・中学生の部》

名古屋市立 桜丘中学校（東区）一年　伊藤 かこ さん

冬耐えし　ことは語らず　牡丹咲く

四月、徳川園の代表の花である牡丹が大輪の花を華麗に咲かせます。寒い冬に耐えたことを決して悟られず、美しく咲く牡丹の花に筆者は尊敬の念をいだいているのでしょう。気高い牡丹の花が「花の王」といわれるのも納得できます。

【審査員　加藤 啓子】

《最優秀作品・中学生の部》

名古屋市立 冨士中学校（東区）三年　水谷 優里 さん

赤牡丹　視線集めて　すまし顔

「百花の王」とよばれる豪華で美しい姿をもつ牡丹。なかでも赤い牡丹は「王者の華」にふさわしい気品と他を威圧する独特なオーラを放ちます。
「すまし顔」で少女らしい感性を示しながら、「赤牡丹」の放つオーラをむだなく表現して見事です。

【審査員　桐原 千文】

《入選作品・小学生の部》

名古屋市立 山吹小学校（東区）二年　高瀬 朱那 さん

わたげさん　春かぜのって　さんぽする

名古屋市立 矢田小学校（東区）二年　細川 将之介 さん

みつばちは　ぶんぶんとんで　だんすする

《入選作品・小学生の部》

名古屋市立 筒井小学校（東区）三年 岩田 渚（いわた なぎさ） さん

ちょうたちも みんなあそぶよ おにごっこ

名古屋市立 旭丘小学校（東区）三年 粂（くめ） 佳伽（よしか） さん

さくらちり ピンクのじゅうたん できあがり

名古屋市立 旭丘小学校（東区）四年 今枝（いまえだ） 和香（のどか） さん

もうなつか 花火みたいな ぼたんだよ

《入選作品・中学生の部》

名古屋市立 あずま中学校（東区）一年 森（もり） みづ希（き） さん

春が来た 花はみんなの 笑顔かな

《入選作品・中学生の部》

名古屋市立 冨士中学校（東区）三年 石原（いしはら） 稜大（りょうた） さん

君の髪 かすかに香る 春の花

名古屋市立 冨士中学校（東区）三年 岡村（おかむら） 茜（あかね） さん

春来ると いつもの道が 桜色

名古屋市立 あずま中学校（東区）三年 奥田（おくだ） 朝紗乃（あさの） さん

桜咲き 闘志わきたつ 受験生

名古屋市立 冨士中学校（東区）三年 水谷（みずたに） 晶（あきら） さん

山吹や 薄闇照らす 道しるべ

《総評》

徳川園の俳句大会にご参加していただきました小学生、中学生の皆さん、どうもありがとうございました。俳句大会は昨年秋の紅葉祭に次いで第四回目となります。今回のテーマは「春」でしたので「花」を詠んだ句が多かったですが、「蝶ちょう」などの「虫」や「新学期への不安」など、さまざまな視点で作者の春をとらえた句も多くありました。

さて、今回の最優秀作品に選ばれた四点は、いずれも魅力的ですばらしいものでした。小・中学生の皆さんには、どうしても学年による表現力の違いがありますので、年齢に応じた言葉で表現されていることなどを考え、審査員の心に強く残ったものを選考しました。また、優秀や入選に漏れた作品の中にも心に留まる表現をされた作品も多々ありました。

徳川園および徳川美術館、名古屋市蓬左文庫は、尾張徳川家由来の歴史文化施設として、中世武家文化の魅力を国内外の皆さまに発信していくことが役割であります。このような自然、歴史、文化的環境の場所で、四季の情景を「俳句」で表現することは感性を育む大切な時期である小・中学生の皆さんにとって言葉を大切にする機会になったのでは、と思います。

最後に、今回の大会で小・中学生の皆さんが俳句を考えるにあたって、助言や指導をしていただいた保護者、学校教員の方々に厚く御礼申し上げます。今後も子どもさんが自ら感性や想像を言葉に表現する楽しみにご一緒に参加していただけることをお願いいたします。

審査会代表　徳川園管理事務所長　岩田　正雄